

# 令和三年度入学者選抜学力検査問題

## 国語

(配点)

<b>1</b>	12点
<b>2</b>	31点
<b>3</b>	29点
<b>4</b>	28点

### (注意事項)

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は一ページから十四ページまである。検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者かんとくしゃに知らせること。
- 4 解答用紙に氏名と受検番号を記入し、受検番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。受検番号が「〇(ゼロ)」から始まる場合は、「〇(ゼロ)」を塗りつぶすこと。
- 5 解答には、必ずHBの黒鉛筆を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりにマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。
- 6 一つの解答欄らんに対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。
- 7 解答を訂正ていせいするときは、きれいに消して、消しきずを残さないこと。

1

次の(1)から(6)までの傍線部の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでのなかから一つずつ選べ。

- |                                   |                                |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| (1) 博物館でドウ像を鑑賞する。 ア 脇 イ 銅 ウ 同 エ 導 | (2) 学問をオサめる。 ア 収 イ 納 ウ 治 エ 修   |
| (3) 城の天守カクからのながめ。 ア 角 イ 閣 ウ 格 エ 革 | (4) まるまるとコえた馬。 ア 肥 イ 請 ウ 太 エ 越 |
| (5) 円滑に議事をススめる。 ア 促 イ 劍 ウ 薦 エ 進   | (6) フルつて応募する。 ア 震 イ 振 ウ 奮 エ 降  |

2 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

行く春を近江の人と惜しみけり

芭蕉

先師曰く、尚白が難に、〈近江〉は〈丹波〉にも、〈行く春〉は〈行く歳〉にもふるべし、と言へり。汝いかが聞きはべるや。去來曰く、尚白が難当たらず。湖水朦朧として、春を惜しむにたよりあるべし。殊に今日の上にはべる、と申す。先師曰く、しかり。古人もこの國に春を愛すること、をさをさ都に劣らざるもの。去來曰く、この一言、心に徹す。行く歳、近江にゐたまはば、いかでかこの感ましまさん。行く春、丹波にいまいば、もとよりこの情浮かぶまじ。風光の人を感動せしむること、真なるかな、と申す。先師曰く、汝は去來、ともに風雅を語るべきものなり、ことさらによびたまひけり。

(『去來抄』)

尚白という人は、芭蕉の『野ざらし紀行』の旅の際に入門した人で、近江ではいちばん先輩格の門人であったのですが、<sup>(注3)</sup>『猿蓑』期になつてきますと、芭蕉の新しい動きについて行けなくなつてしまつて、ちょっとしたそねみ、ひがみを抱いていたのでしょう。そこで芭蕉の句を非難するといったようなことになつたのだろうと思ひますが、その尚白の非難というのは、「近江は丹波にも、行く春は行く歳にもふるべし」ということであつた。つまりこの一句の中で、「行く春」「近江」とあるのを他のことばに置き換えて、たとえば、

行く歳を近江の人と惜しみける

としても、あるいは、

行く春を丹波の人と惜しみける

としたつて、一句として成立するじゃないか、というのです。このように一句の中のことばがもうギリギリ、これ以上他には動かせないといった決まりに達してなくて、まだ他のことばに置き換えるような場合、それを「ふる」、つまり振れる、動くというふうに言ひます。

芭蕉は去来に、そうした尚白の非難のあったことを伝えて、「汝いかが聞きはべるや」（「聞く」というのは単に耳で聞くという意味ではなく理解し鑑賞するという意味）、おまえはどう受け取るかね、と質問をした。去来は答えて、「尚白が難当たらず」、尚白の非難はマトはずれ、見当違います。「湖水朦朧として、春を惜しむにたよりあるべし」、近江の国は琵琶湖の面おもても朦朧とうち霞かすんで、いかにも惜春の情を吐露Bとろするのにふさわしいものがあるでしょ」と、こう言つております。

「湖水朦朧として」というのは、何でもない文句のようですが、その背景に実は芭蕉たちの間の共通の詩情をささえるものとして、蘇東坡の「西湖」の詩のあつたことをつけ加えておく必要があるでしょう。西湖の晴雨ともに美しい景色をもし美人西施のおもかげに比するならば、その厚化粧をした姿も美しければ、また薄化粧の姿も美しいがごとくであるとよんだものです。

芭蕉たちは湖の景色に接するとき、いつもこの詩を思い浮かべて西湖に思いを馳せ、そこにあるいは中国の美人西施のおもかげを、もしくは、それを日本に移して美女小野小町のおもかげを思い描いたりました。去来が「湖水朦朧として」と言つたのも、そうした湖に寄せる共通の詩情にもとづき、そこに、蘇東坡によつて「山色朦朧」とよまれた西湖のおもかげを重ね合わせてのことにはかならなかつたといつていいでしよう。

ところで去来はここでさらに、「殊に今日の上にはべる」と、とくに「今日の上」に力点をおいて答えている。つまり、これは今日の芭蕉先生の現実の体験の上にもとづき、実際の景色に臨んでの作品ですから、もうふれるなどという非難の介入する余地はありません、というのですね。芭蕉はそれを承けて「しかし、おまえの言うとおりだと大きく肯定しながら、しかし、「古人もこの国に春を愛すること、をさをさ都に劣らざるもの」を」と、ちょっと違うことをつけ加えています。

昔の歌人たちも、この近江の国の春光を愛惜したことは、彼らが都の春を愛惜したのにけつして劣らないくらい深かつたことだ、というのですね。それは、たとえば『新古今集』に收める後京極良経の「あすよりは志賀の花園かず霞かすむ日のあかぬ匂ひに浦風うらかぜぞ吹く」などの和歌を心に置いて、そう言つたものでしよう。去来はそれを聞いて、「この一言、心に徹す」、今の先生のおことばは深く心の中にしみ徹とおりました。もし先生が行く歳近江にいらっしゃったならば、どうして去り逝く年を惜しむというような詩情が生まれてしまふか。また、行く春丹波にいらっしゃったならば、もとよりこうした惜春の詩情は浮かびますまい。「風光」（自然の景色）というものが人を感動せしむることには、昔の歌人を感動させ、今まで芭蕉先生を感動させる、古今を一貫して変わらない真実なるものがござりますなあ、というふうに心からの共感を示したところ、芭蕉は「汝は去来、ともに風雅を語るべきものなり、とことさらに悦びたまひけり」、おまえこそはともに風雅を語るに値する人間だと非常に悦ばれたというのです。

（尾形彷おがたつとむ『芭蕉の世界』による）

（注5）蘇東坡の

（注6）新古今集

（注7）志賀の花園

（注8）浦風

(注1) 近江<sup>ハ</sup>今<sup>の</sup>滋賀県。

(注2) 去来<sup>ハ</sup>芭蕉の門人、向井去来。『去来抄』はその著作。

(注3) 『野ざらし紀行』<sup>ハ</sup>一六八四年から翌年にかけての旅の紀行文。

(注4) 『猿蓑』<sup>ハ</sup>芭蕉円熟期の著作。

(注5) 蘇東坡<sup>ハ</sup>中国、宋時代の文学者・政治家。

(注6) 『新古今集』・『続後拾遺集』<sup>ハ</sup>鎌倉時代の和歌集。

(注7) 後京極良経・藤原定家<sup>モウ</sup>鎌倉時代の歌人。

問1 本文中の、A そねみ、吐露する<sup>A</sup><sub>B</sub> の意味として適當なものを、それぞれ次のアからエまでの中から一つ選べ。

A ア あせる気持ち イ 見下す気持ち

B ア 心に思つていることを隠さず述べる イ 感動のあまり思わず声を出す

ウ 隠しておきたいことをつい白状する エ 無意識に本心を語ってしまう

問2 本文中に、芭蕉の句を非難する<sup>(1)</sup> とあるが、尚白は芭蕉の句をどのように批判したのか。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの 中から一つ選べ。

ア 「近江」「行く春」には共通の詩情をささえる伝統的要素がない。 イ 「近江」「行く春」は実体験に基づいて用いた表現とは言えない。

ウ 「近江」「行く春」にはその語を使わねばならない必然性がない。 エ 「近江」「行く春」は情景や状況を思い浮かせる力が足りない。

問3 本文中に、「尚白が難当たらず」<sup>(2)</sup>、尚白の非難はマトはずれ、見当違います。とあるが、去來が尚白を「見当違い」とするには、なぜか。その理由として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 近江で作られた古歌の伝統を踏まえて惜春の情を詠んだ句であると尚白は知らないから。

イ 芭蕉に対する尚白のひがみによる感情的な非難で句そのものに対する批判ではないから。

ウ 湖面がおぼろに霞み渡っている光景を実際に見て詠んだ句だと尚白には分からぬから。

問4 本文中に、もし美人西施のおもかげに比するならば<sup>(3)</sup>、とあるが、どういう意味か。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア もし美人の西施の姿を思い描くなれば イ もし美人の西施の姿になぞらえるならば

ウ もし美人の西施が目の前に現れるならば エ もし美人の西施が湖を背に立つなれば

問5 本文中に、殊に今日の上にはべる とあるが、どういう意味か。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(4)</sup>

アとりわけ今日の出来ばえは格別でございます。 イ 特に実際にその場で作ったものでございます。

ウ 今から現実の景色を見て作るのでございます。 エ 案外今日の出来事が該當しそうでございます。

問6 本文中に、古人もこの国に春を愛すること、をさをさ都に劣らざるものとあるが、どういう意味か。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(5)</sup>

ア この地方で春を惜しんだ古人の思いは、都にいた時に比べて日に日に強くなっていたらしい。

イ 丹波の国で春を惜しんだ古人の思いが、都で春を惜しむ気持ちより勝っているとは言えない。

ウ この日本の様々な地方で春を惜しんだ古人の思いは、都で春を惜しむのと大した違いはない。

問7 本文中に、悦ばれた<sup>(6)</sup>とあるが、この「れ」と同じ働きをするものはどれか。最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 先生から学生時代に苦労されたお話を聞いた。 イ 卒業写真を見たら先生のことが懐かしく思い出された。

ウ 先生は登山中にハチに刺されて困ったそうだ。 エ 先生に指名されてクラスメイトの前で詩の朗読をした。

問8 本文の内容に合致するものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(7)</sup>

ア 近江という地名には、中国の西湖という地名と同様に深い歴史的な意味合いが込められているのである。

イ 古い時代の和歌をもとに置いていれば、今いる地名を和歌に詠まれた地名に置き換えて句を創作してよい。

ウ 古代の貴族と同じ地で同じ感慨を抱いて句を詠むことによって、初めて人々を感動させる作品ができる。

エ 昔の人が詠んだ詩歌を踏まえつつ自分の体験を句に詠むことで、伝統的な詩情とつながることができる。

(1) 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

地球上のあらゆる物質は動いており、時とともにその空間上の位置を変える。極めて瞬時には原子レベルで移動するものもあるだろう。しかし、われわれ人間が日常の感覚でとらえられるかぎりでのモノの移動は、分子レベル、あるいは化合物レベルもしくはそれ以上のレベルである。酸素はO<sub>2</sub>という分子の形で移動する。<sup>(注1)</sup>活性である酸素は、他の元素と結びついた形でも動き回る。酸素分子が大気中から消え去らずに動き回るので、酸素を必要とする生物は存在できるのである。

酸素と水素が結びついてできた水(H<sub>2</sub>O)は大気圈内を動き回る。地上あるいは河川・海洋から蒸発した水は、再び雨となつて地上に戻る。地中に染み込んだ水<sup>(注2)</sup>も湧水となり、あるいは河川に流れ込むことによつていすれば大気に移動し、再び雨となつて地上に降り注ぐ。どのような経路をとつて循環するかは、地理的条件・気象条件などさまざまな条件に依存する。海洋の水は、海洋内部においても移動する。海洋の大きな循環のスピードは極めて緩やかで、千年以上の単位で動くと考えられている。

さて、物質の動きおよびその相互作用を関連付けて捉えることは、全く無限定の状況では行い得ない。ある領域ないし範囲を設定する必要がある。このように定められた領域ないし範囲のことを「系」と呼ぶことがある。系を設定するとき、物質の性質を基にして行う場合もあるし、地理的な条件を基にしてする場合もある。また、どのようにものをみるかと、いうことに依存して行う場合もある。

**a**、生物の生息という性質の視点から領域設定を行うと、「生態系」という系が設定できる。また、水の循環を見る場合、河川の流域といふ系に限つて把握することも可能である。さらに、経済的な関係に絞つて物質の動きを見るのも可能であるが、その場合「経済系」という範囲でものを見ることができます。

どのような系を例にとってもよいが、とにかく一つの系を取つたとき、その系には物質が流入する一方その系から物質が流出する。もちろん、短期的には一つの系への物質の流入・流出は一定ではないことがある。自然による揺らぎもあるだろうし、人為的な揺らぎもある。つてもその容量(これを環境容量と呼ぶことがある)は有限であるから、一方的に流入が続いたり、一方的に流出が続いたりすることはあり得ない。一つの系への物質の流入・流出が一定になり、系のなかの循環がバランスの取れた状態になつたとき、その系は「定常状態」にあるという。

流入・流出の收支が均衡しないと系は乱され、それまであつた定常状態は成立しなくなるけれど、系の攪乱の程度が小さい場合には元の定常状態に復帰することが多い。そのような場合、当初あつた定常状態は安定であるという。しかし攪乱の程度が著しく大きい場合、系はもはや元の定常状態を保つことができず、全く異なつた定常状態へと移行することもある。そして攪乱の行き着いた末の定常状態において種が絶滅してしまうということもあり得る。

環境問題で領域の範囲を定める場合、通常最も大きなものとしては地球を考えればよい。確かに隕石の衝突などによつて、宇宙から物質が流入する場合もあるが、現実的にはその流入量は無視しうるので、ここでは地球を考えればよい。

地球という系は、物質的な流入・流出という意味では閉じているが、エネルギーの流入・流出という意味では閉じていない。常に太陽からエネルギーを受け取つており、また熱を外に排出している。加えて、地球は自転することによつて、常に物質の動きに変動の作用を与えている。こうして物質循環という意味では地球という系は閉じているが、常に攪乱的作用を受けている。(A)

にもかかわらず、地球は常にある種の定常状態を取り戻そうとする重要な性質があると考えられている。この性質は、ホメオスタシスあるいは恒常性と呼ばれている。地球という系では、生物と非生物<sup>(注4)</sup>が有機的に結びついた結果、外部からの攪乱作用があつても、以前と同じような性質を保とうとする力が働いている。□C、地球という系は自己調整機能を持つていると考えられる。地球という系に自己調整機能が備わつてゐるという仮説を「ガイア仮説」という。この仮説は、J·E·ラブロックという科学者によつて唱えられた。(B)

ラブロックによれば、生物が地球上に現れて以来、およそ四十億年近くたつたが、その間に太陽からの発熱量は増加した。それにもかかわらず、生物にとって自然環境は激変することはなく、地球は生物にとつて住みやすい場所であり続けた。この例からもわかるように、地球という系は、何らかの変動要因を与えられているにもかかわらず、恒常性を取り戻そうとしていると考えられるのである。本来化学反応しやすい酸素が、O<sub>2</sub>という形で大気中のガスの二〇%を占めており、その濃度<sup>(注5)</sup>は一定しているのも、地球という系で生物と無生物が安定的な相互関係を結んでいると考えられるからである。

活性な酸素が安定的に地球上に存在することは、好気性(酸素に基づく代謝を行う性質)の生物にとつてこれほどありがたいことはない。(C)

しかしながら、地球という系においてホメオスタシスないし恒常性という性質がこれまであつたとしても、未来永劫<sup>(注6)</sup>であり続ける保証はない。また、仮に地球という系でホメオスタシスが保たれたとしても、地球上の限られたより小さな系においては定常状態が著しく乱され、物質循環の状態が激変するということは十分あり得る。(D)

今から六五〇〇万年前の隕石の衝突によつて地球の環境は激変した。<sup>(注5)</sup>核の冬のように、粉塵<sup>(注7)</sup>が空を覆つたため日差しは地表に届きにくくなり、光合成は難しくなつた。この結果植物量は減少し、これを食べていた草食恐竜<sup>(注8)</sup>の数が急激に減つた。さらに、これを捕食していた肉食恐竜も存在ができなくなつた。こうして恐竜の時代が終焉<sup>(注9)</sup>したのである。そして、わずかな量の植物で生きていた小型哺乳類<sup>(注10)</sup>が、大型爬虫類<sup>(注11)</sup>の恐竜にとつて代わるようになる。この小型哺乳類が人類の祖先というわけである。今、人類は隕石の衝突に匹敵するような環境の変化を地球にもたらしているのかもしれない。そうだとしたら、ホメオスタシスという性質が常に保証されていると想定することはあまりにも楽観的に過ぎる。

(注1) 活性<sup>1</sup> 物質が化学反応を起こしやすい性質をもつてること。

(注2) 液水<sup>2</sup> 地下から湧き出る水。

(注3) 攪乱<sup>3</sup> かき乱すこと。

(注4) 有機的<sup>4</sup> 多くの部分が結びつき、全体が互いに密接に関連し合っているさま。

(注5) 核の冬<sup>5</sup> 核戦争によつて大気中に巻き上げられた粉塵で太陽光線がさえぎられて起ると想定される寒冷化現象。

問1 空欄<sup>6</sup> a、b、cに入る語として適當なものを、それぞれ次のアからエまでの中から選べ。ただし、同じ語は二回入らない。

ア しかし イ もしくは ウ すなわち エ たとえば

問2 次の一文が入るのは、本文中の（A）から（D）のどことか。最も適當なものを見つけてください。

その場合、生物種の中には絶滅するものも出てくるだろう。

問3 本文中に、地球上のあらゆる物質は動いており、時とともにその空間上の位置を変える。<sup>(1)</sup> とあるが、どういうことか。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 地球上のすべての物質は、小さく分解された形になつて、化学変化を繰り返しながら広範囲を移動し続けているということ。

イ 地球上のすべての物質は、人間の視覚でとらえられる範囲で、頻繁に出たり入りたりする運動を繰り返しているということ。

ウ 地球上のすべての物質は、その形を変えながらも、時間がたつにつれて地球という領域の範囲内を移動しているということ。

エ 地球上のすべての物質は、表面上は変化しないように見えても、その内部は分子レベルで常にに入れ替わつてゐるということ。

問4 本文中に、全く異なつた定常状態へと移行する<sup>(2)</sup> とあるが、地球環境を例に取つた場合は、これはどのような状態になることを意味するか。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 地球全体として物質循環のバランスは取れているが、自然環境や生物の生息状況は大きく変化を遂げた状態。

イ 太陽からのエネルギー流入の変化によつて地球の平均気温が下がり、温暖化以前の自然環境が復元した状態。

ウ 物質循環のバランスが大きく崩れ、人間を含めた生物種の全てが地球上では生存を続けられなくなつた状態。

エ 人間の活動によつて物質の流出量が増加し、地球全体で見た物質の流入・流出の收支が合わなくなつた状態。

問5 本文中に、物質循環という意味では地球という系は閉じているが、常に攪乱的作用を受けている。とあるが、どういうことか。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 地球に流れ込んでくるのは、物理的実体を持たない熱エネルギーのみであるが、その熱が地球の物質循環に与える影響は、ますます拡大し続

けているということ。

イ 地球全体で見れば、物質の動きはバランスが取れているが、地域的に細かく系を設定した場合は、物質循環の定常状態が著しく乱れている地域もあるということ。

ウ 地球に外部から物質が流れ込むことはほとんどないが、地球上の物質の動きは、太陽からのエネルギーや地球自体の動きに伴う影響を受けているということ。

エ 地球全体を視野に入れるとき、物質の動きについての定常状態は地球誕生時からほとんど変化していないが、変化を促す要因は少しずつ蓄積されているということ。<sup>(4)</sup>

問6 本文中に、地球という系においてホメオスタシスないし恒常性という性質がこれまであつたとしても、未来永劫であり続ける保証はない。<sup>(4)</sup>とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 地球上の自然環境は、人間の働きかけに応じて人間が生きるために必要な物質を供給し続けてきたが、永遠に物質の供給が続いているはずはないということ。

イ これまで地球環境は生物と無生物が安定した関係を結び、生物が住むのに適した状態を保つてきたが、今後も永遠にその状態が続くとは限らないということ。

ウ 太陽のエネルギーのおかげで、地球の物質循環は動きを止めず、生物も生き続けてきたが、そのエネルギーが減少すれば生物は絶滅するしかないということ。

エ どのような地球環境の変動も、今までのところ、長期的に見れば元の定常状態に戻ってきたと言えるが、これからも同じ状態が続くわけではないということ。

問7 本文中に、ホメオスタシスという性質が常に保証されていると想定することはあまりにも楽観的に過ぎる。とあるが、なぜそう言えるのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(5)</sup>

ア 人類が地球環境に変化をもたらした結果、大気圏の状態に変化が生じ、太陽自体の発熱量も減少して寒冷化していくかもしれないから。

イ 人類が地球環境に変化をもたらした結果、新たな物質が生成されることにより、地球を循環する物質の量が増加するかもしれないから。

ウ 人類が地球環境に変化をもたらした結果、人類だけは生き残れるが、それ以外の生物は恐竜のように絶滅してしまうかもしれないから。

エ 人類が地球環境に変化をもたらした結果、地球上の物質循環に大きな変化が生じ、人類そのものの生存が困難になるかもしれないから。

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

高校二年生の美緒は、合唱部の友人にからかわれたことがきっかけで、学校に行けなくなった。母との行き違いから、美緒は衝動的に家を飛び出し、祖父の住む盛岡もりおかに行く。祖父は毛織物の工房じゅうばうを営んでおり、美緒はしばらくの間、羊毛を紡いで手織りの毛織物を仕立てる作業を学ぶことになった。

祖父が発送する荷物は大量のスプーンだった。長年、日本と世界のさまざまな土地に行くたびにこつこつ集めてきたもので、木材や金属などでつくられたものが一本ずつ仕切られたケースに整然と納まっていた。

「いつかこのコレクションを持って旅に出ようと思っていた。」

銀色のスプーン(注1)をクロスで磨きながら、祖父が笑った。

「路上に絨毯じゆうたんを敷いて、さじをすらりと並べて買ってもらおうかと。興味を持った人には来歴ひろを披露する。どこの産か、どうやって手にいれたか、どこが魅力か。のんびり客と話をしながら、さじの行商をするんだ。」

「荷物運びとかいらない？ そしたら、私もすみっこにいる。」

「体力的にもう無理だな。一度ぐらいやつてみてもよかつた。」

祖父が今度は木製のスプーンを布で拭いた。素朴そぼくな木目をいかしたスプーンで、コーンスープやシチューをすくって食べたらおいしそうだ。

「でも、良い落ち着き先が見つかったんだ。若い友人が料理屋を開くので、彼女に譲る。好きなさじを客が選んで食事をする仕組みにすると言っていた。」

鉱物に本、絨毯や織物。他にも祖父が集めているものはたくさんある。染め場の奥にはエアコンで常に温度と湿度の管理をしているコレクション用の部屋があるほどだ。

「どうしてスプーンを集めただの？」

「口当たりの良さを追求したかったのと、あとはバランスだな。良い職人が削ったさじは軽くて美しい。手に持ったときのバランスが気持ちいいんだ。そのさじで食事をすると軽やかでな。天上の食べものを口にしている気分になる。同じことは私たちの仕事にも言える。<sup>(1)</sup>」

「スプーンと布つて、全然別物っぽく思えるけど……。」

祖父が手を止めると、奥の部屋に歩いていった。すぐに戻つてくると、手には紺色のジャケットを抱えていた。生地はホームスパンだ。

「おじいちゃんのジャケット？」

「そうだ。お祖母おばあちゃんが織つたものだ。持つてごらん。」

渡されたジャケットは、見た目よりうんと軽く感じた。

「あれ？ 軽いね。」

「それでもダウンジャケットにくらべると若干重いがな。」

ジャケットを羽織つてみると若干重いがな。  
袖に腕を通したとたん、「あれ？」と再び声が出た。手で感じた重量が身体に伝わってこない。肩にも背中にも重みがかからず、着心地がたいそう

軽やかだ。それなのに服に守られている安心感がある。

「手で持つたときより、うんと軽い。」

「手紡ぎ、手織りの糸は空気をたくさんはらむから軽くて温かい。身体に触れる布の感触が柔らかいから、着心地が軽快になる。さじにかぎらず、良い職人の仕事は調和と均衡が取れていて心地よいんだ。音楽で言えば」

「ハーモニー？ もしかして。」

「そうだ、よくわかったな。」

「私、中学からずっと合唱部に入つてたの。」

祖父にジャケットを返すと、慈しむようにして大きな手が生地を撫でた。

「美緒は音楽が好きなんだな。」

あらためて考へると、合唱はそれほど好きでもなかつた。

熱心に部に勧誘されたことが嬉しかつた。合唱部はみんな仲が良さそうに見えたから、その輪に入つていると安心できただけだ。  
「部活、そんなに好きじゃなかつたかも。なんか……<sup>(2)</sup>私つて本当に駄目だな。」

ジャケットを傍らに置くと、祖父がスプーンの梱包作業に戻つた。

「この間、汚毛<sup>(3)</sup>を洗つただろう？ どうだつた？ ずいぶんフンをいやがついていたが。」

「臭いと思つたけど、洗い上がりを見たら気分が上がつた。真っ白でフカフカしてて。いいかも、つて思つた。汚毛、好きかも。」  
そうだろう、と祖父が面白そうに言つた。

「美緒も似たようなものだ。自分の性分について考へるのは良いことだが、悪いところばかりを見るのは、汚毛のフンばかり見ると同じことだ。」  
祖父が何を言い出したのかわからず、美緒は作業の手を止める。赤い漆塗りのスプーンを取り、祖父が軽く振る。

「学校に行こうとすると腹を壊す。それほどの繊細さがある。良いも悪いもない。駄目でもない。そういう性分が自分のなかにある。ただ、それだけだ。それが許せないと責めるより、一度、<sup>(3)</sup>丁寧に自分の全体を洗つてみて、その性分を活かす方向を考えたらどうだ?」

「活かすって? どういうこと? そんなのできるわけないよ。」

「そうだろうか? 繊細な性分は、人の気持ちのあやをすくいとれる。ものごとを注意深く見られるし、集中すれば思わぬ力を發揮することもある。<sup>B</sup>へこみとは、逆から見れば突出した場所だ。悪い所ばかり見ていないで、自分の良い点も探してみたらどうだ?」

「ない。そんなの。」

「即答だな。」

祖父がスプーンに目を落とした。

「だって、ないから。自分のことだから、よくわかってる。」

それは本当か、と祖父が声を強めた。

「本当に自分のことを知っているか? 何が好きだ? どんな色、どんな感触、どんな味や音、香り<sup>かおり</sup>が好きだ。何をするとお前の心は喜ぶ? 心の底からわくわくするものは何だ。」

「待つて。そんなの急にいっぱい聞かれても」

「ほら、何も知らない。いやなところなら、いくらでもあげられるのに。」

からかうような祖父の口調に、美緒は顔をしかめる。

「そんなしかめ面<sup>おもて</sup>をしないで、自分はどんな『好き』でできているのか探して、身体の中も外もそれで満たしてみろ。」

「好きなことばっかりしてたら駄目にならない? 苦手なことは鍛<sup>きた</sup>えて克服<sup>こくせい</sup>しないと……。」

「なら聞くが。責めてばかりで向上したのか? 鍛えたつもりが壊れてしまつた。それがお前の腹じゃないのか。大事なものための我慢<sup>がまん</sup>は自分を磨く。ただ、つらいだけの我慢は命が削られていくだけだ。」

祖父がテーブルに並べたスプーンを指差した。

「手始めに、氣に入つたさじがあつたら、それで食事をしてみる。良いさじで食物を口に運ぶ感触をとことん味わつてごらん。」

「えつ、でも……。」

戸惑いながらも梶包していないスプーンと、コレクションが納まつた箱を美緒は一つずつ見る。祖父が集めたものは、どれも色や形が美しい。そし

ておそらく外見のほかにも祖父の心をとらえた何かがある——。しだいに興味がわいてきて、次々とスプーンが入った箱を開けて見る。

木材、金属、動物の角。さまざまな材質のスプーンを持ったあと、最後に残った箱を開けた。

赤や黒、赤紫色に塗られた木製のスプーンが出てきた。

無地もあるが、金箔などで模様が描かれたものや、虹色に輝く装飾が施されているものもある。

一本、一本見ていくなかで、シンプルな黒塗りのスプーンに心惹かれた。手にすると、スプーンの先から柄に向かって、真珠色の光が走った。

「おじいちゃん、これはうるし?」

祖父はうなずいた。

「これがいい、これが好き。おじいちゃん、このスプーンをください。」

「美緒はこれが好きか。どうしてこれを選んだ?」

「直感? 何かいい感じ。」

祖父の目がやさしげにゆるんだ。目を細めるとやさしく見えるところは、<sup>(注4)</sup>太一と似ている。

ほめられているような眼差しに心が弾み、黒いスプーンを見る。

幼い頃、壁にかかった視力検査表で視力を調べられたことがある。

黒いスプーンを右目に当て、おどけてみた。

「視力検査……。」

一瞬、不審そうな顔をしたが、祖父はすぐに横を向いた。口もとに軽くこぶしを当てて、笑っている。

おどけた自分が猛烈に恥ずかしくなり、美緒はスプーンを握った手を膝に置く。

たいして面白くもないだろうに、祖父は目を細めてまだ笑っていた。

(伊吹有喜『雲を紡ぐ』による)

(注1) クロス=布。 (注2) ホームズパン=手で紡いだ太い羊毛糸を手織りにした厚手の織物。

(注3) 汚毛=ファンなどがついて汚れている、まだ洗っていない羊毛。

(注4) 太一=美緒の「またいとこ」で、工房を手伝う大学生。

問1 本文中の、来歴を披露する、人の気持ちのあやをすくいとれる の意味として適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

A ア これまでたどってきた経過や歴史を語つて聞かせる。

イ 素材や作られた工程について細かく語つて聞かせる。

ウ 作り手が経験してきた人生の道筋を語つて聞かせる。

イ 人が言われて嫌になる言葉を予測し避けることができる。

B ア 人の感情を読み取つて相手に合わせて話すことができる。

イ 人が言われて嫌になる言葉を予測し避けることができる。

ウ 人の心の動きを細かいところまで思いやることができる。

イ 人が不安に感じている様子を察して慰めることができる。

問2 本文中に、同じことは私たちの仕事にも言える。<sup>(1)</sup> とあるが、どういうことか。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 優れた職人は、良い品を熱心に探して愛用するコレクターによつて育てられる。

イ 優れた職人が作り上げた品はバランスが取れており、軽やかで使い心地がよい。

ウ 優れた職人は、使い続けるうちに天上のもののように軽くなつていく品を作る。

イ 優れた職人が作り上げる品は、見た目の美しさよりも使い心地を優先している。

問3 本文中に、私つて本当に駄目だな。<sup>(2)</sup> とあるが、ここでの美緒の気持ちの説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 仲が良くて楽しそうだと思つて入つた合唱部の輪に入れず、時間を無駄にしてしまつたと後悔した。

イ 効誘されるまま合唱部に入つた経緯を思い出し、一人で決められない自分の決断力のなさを恥じた。

ウ 合唱が好きでもないのに部活に参加していたのは不誠実だと気づいて、部員に申し訳ないと思った。

エ 合唱が好きだという動機もないままに、ずっと合唱部にいただけの自分に気づいて情けなくなつた。

問4 本文中に、丁寧に自分の全体を洗つてみて。<sup>(3)</sup> とあるが、どういうことか。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 嬉しいこともつらいことも体験してきた過去を振り返り、自分が何に喜びを感じるのか改めて考えて、自分を心地よさで満たしてみること。

イ 長所を覆い隠していた欠点を、汚毛の汚れを洗うように一つ一つ取り除くことで、本来持つてゐる長所がはつきりと見えるようになります。

ウ いいところと悪いところが混じり合つてゐる自分自身をよく観察し、様々な面を細かく見つめ直して、改めて自分について考えてみること。

エ 完璧な人間であろうとするあまり自分を責めてばかりいた、過去の暗い気持ちを洗い流し、前向きな明るい気持ちを取り戻そうとすること。

問5 本文中に、手始めに、気に入つたさじがあつたら、それで食事をしてみろ。とあるが、この時の祖父の意図はどういうものか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。<sup>(4)</sup>

ア 落ち込んで食が進まない美緒を案じ、気に入つたさじを使わせることで食べる意欲を取り戻させ、元気づけようとしている。

イ 気に入ったものを見つけて実際に使うことを通して、自分の心が好きなものに向かっていく喜びを体感させようとしている。

ウ 職人が丹精を込めて作り上げた品を使わせることで刺激を与え、美緒自身のものづくりに対する意欲を高めようとしている。

エ 優れた道具を普段使いさせることで、長年使うことでしか得られない手仕事ならではの味わいを感じ取らせようとしている。

問6 本文中に、黒いスプーンを右目に当て、おどけてみた。<sup>(5)</sup>とあるが、このときの美緒の様子の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 自分をほめてくれているような祖父の反応にうれしくなって、いつになく意欲が高まり、ついつい子供っぽくふざけてみせた。

イ 自分の思いを受け止めてもらえたことに安心して、幼い頃の意欲がよみがえり、わざと子供のようにふるまつて祖父に甘えた。

ウ 素直に自分の感想を言つてしまつたことが恥ずかしくて、おどけたふりをして顔を隠し、照れている自分を悟られまいとした。

エ 高価なものとの価値をよく知る祖父に、品質を見抜く力を認められたことが誇らしくて、見る目のある自分を自慢したくなつた。

問7 本文の記述に関する説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 人とうまく関われない孫娘と、好きなことを貫く祖父との小さな衝突を淡々と描いている。工芸品の色や質感を語り合う中で、美緒が何とか祖父を理解しようとする場面である。

イ 自尊心が強く傷つきやすい孫娘と、職人気質<sup>かたぎ</sup>で頑固な祖父との対話を描いている。工芸を音楽にたとえた会話を通して、不器用な二人が徐々に打ち解けていく場面である。

ウ 敏感<sup>びんかん</sup>で悩みを抱える孫娘と、ものづくりの世界で生きてきた祖父との交流を描いている。工芸品に託した祖父の言葉に触れて、少しずつ美緒が変わっていく場面である。

エ 芸術に鋭い感性を示す孫娘と、同じ感性を持つ祖父との師弟関係を平易な表現で描いている。工芸家を目指す美緒と、師である祖父のひそかな喜びを記す場面である。

